

## 国際文化研修を終えて

### (1) プログラム全体について

まず始めに、以下、インドのことをバーラトと表記することを断っておきます（説明の都合上インドと表記する場合もある）。というのも、今回あちらに行った際、ボランティアの学生数人から「インドではないバーラトだ」と少し強めに指摘されたからです。

実際、インド政府は1949年にバーラトを正式な国号としている為、インドではなくバーラトという呼称の方が正しいということになります。<sup>1</sup>

何故このような但書から始めたかという、今回の研修で、文化というものの重みを感じ、それを尊重することの大切さを学んだからです。そして、これらのことを理解できたのは、私たちをそのような文化に触れさせてくれた、学生たち、先生方、他にも出会った沢山の人々のお蔭でした。

文化というものは、人から生み出されるものであり、それ故に、人というものを通してのみ本当にそれを知ることが出来ます。その意味で、この研修で私たちは、「人」に恵まれました。私たちは、彼らの助けがあったからこそ、ただの旅行や留学として来ていたとしたら行けなかったであろう場所を歩くことが出来、彼らとの関わり合いを通してこそ、本やネットなどでは知ることが出来ないであろう話を聞くことが出来ました。

彼らのお蔭でこの上なく貴重な経験が出来ました。ありがとうございます。

### (2) ヨーガのクラス

ヨーガのクラスは、毎朝、朝食の前にありました。起きて、支度をして、バスに乗り大学へ行くとすぐにヨーガが始まる為、初めは寝ぼけ眼で身体も硬いですが、次第に集中も高まり、身体もほぐれ、心地よく一日を始めることが出来ました。

ヨーガは、今から二千年以上も前に生み出され、禅の起源となったものです。その目指すところは、「心身脱落」という、心と身体が無になる状態<sup>2</sup>です。ただ、いきなりこの状態に到達することは不可能である為、いくつかの段階<sup>3</sup>を踏む必要があります。

大まかに説明すると、まず身体を整えることで心を整え、次にその心と身体とを結び

---

<sup>1</sup> 何故バーラトかという、それは、古代インドの叙事詩『マハーバーラタ』が、「偉大なるバーラタ族の物語」であることから分かるように、バーラトがイギリスによる植民地支配以前のインドを指す言葉だからである。

つまり、インドでは、『マハーバーラタ』程の古代に始まり、19世紀・20世紀にかけての独立戦争で強まった、自分たちがバーラタ族であることへの誇りとしてのナショナリズムが、現在に至っても政府・国民に共通して保たれているということ。

<sup>2</sup> 仏教でいう解脱の状態

<sup>3</sup> 段階は、制戒・内制・坐法・調息・制根・保持・精神統一・瞑想の八つに分けられ、これらは総じて「ヨーガの八支」と呼ばれる。

付け、そしてその状態を最高まで高めることで、自らと宇宙<sup>4</sup>とを一つとし「心身脱落」の境地を目指すのです。その為ヨガでは、様々なポーズをすることで身体を正し、呼吸法によって心と身体を結び付けようとしています。

この様な理由で、今回私達も様々なポーズ・呼吸法を習い、実践しました。ポーズとしては、俯けの状態では伸ばした両手両足を持ち上げる、という簡単なものから、十個の工程を踏まなければならないような複雑なものまでありました。又、呼吸法としては、腹式呼吸のように、息を吸う時にお腹を膨らませ、吐くときに凹ませるものや、右手の親指と薬指を使って鼻を押さえることで、まず左の鼻の孔から息を吸い右の孔から吐き、次に右側から息を吸い左側から吐く、ということを繰り返すものなどがありました。

今回私達が、ヴィジャヤ先生に教えていただいたことは、ヨガの基礎中の基礎だったのだと思います。ですが、それでも、ヨガ発祥の地であるバーラトで、きちんとしたグル<sup>5</sup>にヨガを習えたということは、とても意味のあることでしたし、何より楽しかったです。

### (3) ヒンディー語のクラス

ヒンディー語のクラスは、アニール教授とジャヤシュリー教授のお二人に教えていただきました。クラスは合計六回ありましたが、クラス一回の授業時間の前半半分がアニール教授のクラス、残りの後半半分がジャヤシュリー教授のクラスという授業形式になっており、授業内容は其々の教授ごとに異なるものでした。

私たちは、一人を除きヒンディー語を全く習ったことがなく、事前学習時に矢野先生からほんの少しだけ教えていただいた程度でした。その為、クラスが始まる前は不安を感じていましたが、実際に始まってみると、母音子音の読み書きから丁寧に教えていただけただけで、何も心配することはありませんでした。

そして、特にこのヒンディー語のクラスでよかったことは、ボランティアの学生の皆が、日本人学生一人につきほぼ一人の割合で付き添って教えてくれたことでした。私たちのほとんどにとって、デーヴァナーガリー文字は、全く馴染みのないものでしたし、ヒンディー語の発音は母音が11個もあり、聞いただけでは違いが分からないものが多々ありました。ですが、そんな時は、ボランティアの学生が、書き順から発音の際の舌の動かし方まで、根気よく教えてくれた為、分からないままになることはなく、とてもスムーズに学習が進められました。

もちろん、アニール教授・ジャヤシュリー教授の授業は、丁寧に分かり易いものでした。ですが、ボランティアの皆の助けがなかったならば、私たちは、たった六回のクラスであそこまで理解を深められなかったでしょうし、ヒンディー語を楽しむことも出来なかったと思います。それに、何よりも彼らとヒンディー語でコミュニケーションを取

---

<sup>4</sup> ここでいう宇宙とは、空間としての宇宙ではなく、世界そのものという意味での宇宙。

<sup>5</sup> ヨーガでは、先生のことを「グル」と呼ぶ。

りたいという想いがあったからこそ、毎日のクラスや予習復習にあれほど熱心に取り組めたのだと思います。

#### (4) 英語のクラス

英語のクラスでは、ノミタ教授とタンヴィー教授のお二人にお世話になりました。クラスは、合計7回ありましたが、1回から6回までは、ノミタ教授・タンヴィー教授の順で一回ずつ交互に異なる内容のクラスがあり、第七回の最後のクラスだけがお二人共同のクラスで、それまで其々で別々に教えて下さっていた授業内容を一まとめにした内容のものでした。

昨年のクラスがあまりに基礎的な内容だったことを受け、今年は、向こうの大学が事前に我々生徒の要望を聞いて下さり、極力その意向に副った内容にするということだった為、私たちは、コミュニケーション中心であるということ・バーラト文化を学べる内容であることを希望しました。

そしてその結果、クラスでは、一方的な説明に重きを置いたものではなく、生徒が積極的に発言することを促して下さったり、スピーチや生徒同士での会話の機会を設けて下さったりしました。

又、クラスでは、適宜バーラト文化と関連させて説明して下さったり、逆に私たちが、日本の文化を紹介したりということもありました。

先生方は、とても優しく接して下さり、又、お二人の授業は、私たちの為にととてもよく考えられた内容でした。ただ、日本の学校で教育を受けてきた人ならば分かると思いますが、如何せん日本の学生は自分から発言をすることが苦手です。私自身、海外で学校教育を受けた経験はありませんが、大学での英語のクラスで、海外では積極的に発言をするという話を聞きますし、今回も先生のお一人から、「皆さんは眠いのでしょうか？」といったことを訊ねられた為、これではいけないのだということを意識しました。

このことはバーラトだけに限ったことではないとは思いますが、日本と海外での人々の気質の違いを感じる事が出来た良い機会となりました。

加えて、授業と直接に関係することではありませんが、英語ということに関連したことから、ヒングリッシュを直接聞いたことは、良い経験になりました。ヒングリッシュについてですが、バーラトは英語が公用語の一つである為、多くの人が英語を話しますが、もう一つの公用語であるヒンディー語と発音が混ざり、独特な発音の仕方をする事から、バーラト人の話す英語は俗にヒングリッシュ<sup>6</sup>と呼ばれます。実際、向こうの先生方やボランティアの学生の話す英語の発音は、今まで私たちの触れてきた英語の発音とは違うもので、とても新鮮に感じました。

---

<sup>6</sup> ヒンディー+イングリッシュ=ヒングリッシュ

## (5) バーラト経済の授業

この講義は、単なるバーラト国内の経済状況についての講義ではなく、バーラトが、現在の世界経済でどの立ち位置にいるか、そして、今後世界経済にどのように関わっていくかということについての講義でした。

その内容は、現在の世界経済は、それまでの USA・日本・EU が牽引してきたものに、新興国の中でも頭一つ抜けている BRICS（ここでは、BRICs とせずに、南アメリカを加え大文字の S とした）、特に中国が台頭してきている状況であるが、今後は、バーラトが、日本・EU 諸国・中国を抜いて世界経済の新たな担い手となるだろうというものでした。

この説明に伴い、講義をしてくださったムールティ教授は、その要因の一つとして、2028年には中国を抜き人口が世界一になること<sup>7</sup>を挙げられたのですが、その際、現在バーラトは、世界で最も裕福な人がいる国であるし、世界で最も貧困者がいる国でもあると言及されました。この説明の真偽には、疑問を感じますが<sup>8</sup>、それは別として、私は、このことについての言及がそれ以上なかったことに不安を覚えました。というのも、経済発展という光にばかり目を向けて、貧困という陰から目を背けることになるのではないかと思ったからです。

現在、世界全体というマクロな視点から見ても、地域別・国別というミクロの視点からみても貧困というのは解決の困難な問題であり、それは、途上国のみならず先進国と呼ばれる国々にとっても等しく言えることです。しかし、途上国と先進国とでは、その格差の幅に大きな違いがあります。このことは、単に先進国側に資本があるからという理由だけではなく、先進国は、現在の発展に至るまでの年月の中で、格差問題について改善しようという努力をしてきたからです。

そして、私が言いたいことは、今まさに発展し先進国の仲間入りをしようとする国々は、それまでの先進国と同じ道<sup>9</sup>を歩むのではなく、彼らの歴史から学び踏み台として、より高度な意味での発展を果たすべきではないかということです。さらに、特にバーラトに関して言うならば、今回の講義の中でも言及されていましたが、バーラトは、世界一の人口を誇る民主主義国です。そのようなことを自負する国であるならば、より一層国民全体のことを考えた発展を目指すべきだということです。

## (6) Cultural Exchange Programs

大学では、ほぼ毎日のように歓迎会を催していただき、伝統的なものから近代的なものまで、種々様々に歌や踊りを披露して下さいました。バーラトの人というのは、おし

---

<sup>7</sup> このことに関しては、2013年国連世界人口推移報告書を参照のこと

<sup>8</sup> なぜなら、世界で最も裕福な人がいるのは USA であるから。

[http://memorva.jp/ranking/forbes/forbes\\_world\\_billionaires\\_2014\\_world.php](http://memorva.jp/ranking/forbes/forbes_world_billionaires_2014_world.php)

<sup>9</sup> 貧困・格差問題を置き去りにして発展してきた状況

なべてダンスが好きなようで、日本で言う伝統舞踊のようなものを踊れる人がざらにいて驚きました。

一方の私たちはというと、日本的なものを披露できる人が一人もいませんでした。その為、ああ、これが文化の違いか、などと考えている暇もなく、何かお返しをしようということで、「ソーラン節」と「恋するフォーチュンクッキー」の練習が始まりました。

結果として、「ソーラン節」が途中で途切れるということはありませんでしたが、「恋するフォーチュンクッキー」は向こうの学生と一緒に二回目を踊り、皆さんとても盛り上がって下さいました。

又、スポーツでの交流の際、私ともう一人の男子生徒は、大学のサッカーチームのゲームに加わらせていただきました。ゲーム前は、何だこいつらはといった感じの雰囲気でしたが、いざゲームが終わってみると、「ナイスラン」とか「ナイスプレー」などと声をかけてくれ、笑顔で全員と握手をし、称えあうことが出来ました。

これらのことを通して、人並みではありますが、言葉も民族も国も違うとしても、心は通わせられるのだということを、確かな実感として清に感じました。

## (7) 遠足 (Nashik と Mumbai)

遠足では、毎日大学への送迎をしてくれるマイクロバスに乗り、土曜日は Nashik へ、日曜日は Mumbai へ行きました。行き帰りの道のりは、所々穴が開いていたり、凸型の段差があったりする道路を、日本では即効警察にしょっぴかれそうな運転でぶっ飛ばす為、初めは恐ろしかったですが、次第に慣れました。

### I Nashik

Nashik への遠出では、Nashik 郊外にある、紀元前の仏教遺跡である Pandavleni Caves と、そのすぐ側にある、バーラト映画の父 Dadasaheb Phalke の記念館、加えて、Nashik の市街地にある、数々のヒンドゥー教の寺院に行きました。

Pandavleni Caves は、岩肌に沢山洞穴が彫ってあり、その中には仏像やストゥーパがありました。ここで修行をしていた初期の仏教者たちが、当時は、ほんの僅かしか信者のいなかった仏教が、今では世界中に広まっているということを知ったらどのように感じるのだろうかと思いました。

Dadasaheb Phalke の記念館は、彼の撮った映画のパネルが壁一面に並べられているだけの場所でした。これは、ボランティアの学生の一人から聞いた話ですが、バーラト映画初期の頃は、宗教的な考えから、女性の社会進出はよく思われていなかった時代であった為、男性が女性を演じていたそうです。そのことは、パネルの中でも見られ、日本の歌舞伎や能の女形がするのと同様に、男性が化粧をし、サリーを着て女性になりきっていました

Nashik の中心部は、河で大勢の人が沐浴をしていたり、街中を牛が歩いたり、バーラトと聞いて、私たちが想像する通りの光景がありました。その様子は、実に異国

情緒を感じさせるもので、感動しました。しかし、そこにあったのは、心躍るような幻想的でエキゾチックな光景だけではなく、つらい現実の風景も共にありました。

というのも、そこでは、あちらこちらに、地べたに座って物乞いをする人が見られました。その人たちの殆どは、目に包帯を巻いていたり、手が無かったりと、身体的に不自由な人でした。

後でボランティアの学生の一人から聞いた話ですが、全員ではないにせよ、そのような人々の身体的な欠落というのは、大抵の場合マフィアによるものだということです。マフィアは、貧しい人たちを使い資金を調達するらしく、少しでも同情心を煽れるようにする為、彼らの目を傷付け、腕を切り落とすのだということでした<sup>10</sup>。(貧困・格差などについて感じたことは、(10)で述べます。)

## II Mumbai

Mumbai への遠出では、Gateway of India、お土産屋さん、マクドナルド、Mani Bhavan、Nehru Centre に行きました。

Mumbai の町は、Thane や Nashik と比べ、都会とはいかないまでも、幾分か「整備された街」といった雰囲気をしていました。ただ、その日は雨がドバドバ降っていた為、景観を楽しむ余裕はなく、足元にばかり気を配り、それでも靴をびしょ濡れにしながら歩いて回りました。

Gateway of India は、すぐそこがアラビア海、という場所にありましたが、生憎の雨だった為、感動も半減という感じでした。

お土産屋さんには、謎なビルの中でしたが、物が信頼できるということでした。象牙の彫り物や宗教画など、沢山のバーラトの工芸品があるお店で、時間もあつた為、楽しんでゆっくりと買い物をする事が出来ました。

マクドナルドは、ベジタリアンの多いバーラトの為に、「veg」と「non-veg」<sup>11</sup>の二つに商品が分けられていました。矢野先生曰く、アメリカ発のマクドナルドというグローバルなものとインドの文化が融合した、グローバルな文化の例とのことでした。

今、日本でも、2020年の東京オリンピックに向け、升添要一東京都知事が、様々な宗教に対応できるような飲食店を増やそうとしています。すぐに解決できる問題ではありません。改めて、グローバル化ということの難しさを感じました。

Mani Bhavan は、バーラト建国の父と呼ばれる Mahatma Gandhi が Mumbai にいた時に住んでいた建物で、現在は博物館になっていました。中には、Gandhi に関する写真や記事などの資料、Gandhi の幼少期から暗殺されるまでの模型などがありました。

---

<sup>10</sup> 話をしてくれたボランティアの学生から、インドの物乞いの人々について描かれている映画として、『Traffic Signal』Madhuri Dixit という作品を紹介された。

<sup>11</sup> 「veg」は、動物性食品が全く使われていないもので、「non-veg」は、そうでないもの。ただし、バーラトはヒンドゥー教徒やイスラム教徒が多いからか、牛肉や豚肉が使用されているメニューは一つもなく、あつて鶏肉か卵であつた。

特にすごいと感じた物は、Gandhi からあのナチスドイツの Adolf Hitler 宛の手紙です。その手紙の中で Gandhi は、Hitler に対して、友人として彼に戦争をしないように呼びかけていました。歴史的な偉人たちの意外な関係に驚かされました。

Nehru Centre は、バーラト独立運動の指導者にして、初代首相である Jawaharlal Nehru の名に因んで建てられた大きなビルということでしたが、何を目的にしたのかよくわからない建物でした。中には、原始時代から独立後までのバーラトの発展の歴史に関する展示がありました。この展示は、よく出来たものでしたし、矢野先生やボランティアの生徒たちの詳細な解説の元に見て回ることが出来た為、とても勉強になりました。

#### (8) ボランティアについて

ボランティアの学生たちには、本当に感謝しています。今回の研修は、彼らが、とても親切に、且つあらゆることに気を配り、私たちに付き添ってくれたお蔭で、何事もなく本当に充実した毎日を過ごすことが出来ました。

彼らは、とても友好的に接してくれた為、私たちはすぐに打ち解けることが出来ました。そんな彼らとは、バーラトと日本の文化について色々と話すことが出来、時には、宗教・社会問題などのとても深く繊細な話題について議論しましたし、また、互いの将来の夢などについても話しました。様々なことに対する、日本人とは異なった視点・観点からの彼ら同年代のバーラタ人の考えというのは、とても勉強になりました。

また、彼らの中には、日本語の勉強をしている学生が二人いましたが、その内の一人は、わざわざ他大学から来て下さっていました。その方は、何故そこまでしてくれるのかと疑問を感じる程に、私たちの為に通訳をして下さいました。此度のプログラムがとても良いものとなった要因の半分は、その方の働きにあると思います。

私は、彼らとの交流だけを見ても、今研修に参加した意味があったと感じました。

#### (9) 今後の文化交流について

今後の文化交流について具体的に何か考えていることはありません。ただ、(6)でも述べたように、自国の文化にもっと精通する必要があると感じた為、これからは、より日本文化に触れ、考える機会を増やそうと思います。

又、今回バーラトへ行った際、京都産業大学で受講した志賀浄邦先生の「インド思想史 A・B」の講義で得た知識がとても役に立ちました。私自身、この講義を受けていた場合とそうでなかった場合では、今研修での充実感が大きく違っていたと思いますし、向こうの先生や学生などのバーラトの方々も、自国のことを知ってくれていることをとても喜んで下さっていました。

このことから、文化交流をする際に相手の文化を知っているか否かでは、得るものの多さやその内実の充実度に大きな幅があることが分かりました。故に、自国以外の文化についての知ろうとすること自体が、既に文化交流の始まりなのだと思います。

加えて、知識それ自体は、「知る」ということを完成させる為の半分の要素でしかなく、体験することで「知る」ということは完成するのだと感じました。

## (10) その他

ここでは、向こうでの食事、貧困・格差の問題、宗教の其々について、感じたことを述べたいと思います。

### I 食事について

向こうでは、ほとんどの場合朝食と昼食は大学で食べ、夕食は、毎日宿泊先のマンションのボーイさんが作ってくれる食事を食べました。食べ物は、基本的に、めちゃくちゃ辛い（私は辛いものが苦手の為そう感じましたが、他のメンバーはそうでもなかったようです。）めちゃくちゃ甘いかのどちらかでした。

朝食は、いつも軽めのものが一品で、食後にはとても甘いミルクティーが出ました。

昼食は、タイ米の様な細長くパサパサのご飯、チャパティと呼ばれる米粉で作られた円形のナンのようなもの、ポテトチップスのような触感の円形の薄い食べ物、カップに入ったスープカレー二種類（赤色と黄色）、液体ではないカレー味の食べ物（他に言い様がない）がワンプレートになっていました。因みに、味付けは、毎日ほんの少しずつ違いました。

夕食は、私たちが要望をお願いするとそれに沿って作ってくれ<sup>12</sup>、また、美味しくないと日は一日も無く、毎日絶品でした。

個人的に最も美味しかった食べ物は、学校から出て町中を歩いて回っている時にボランティアの学生と食べた、パニープーリーと言う食べ物でした。それは、ピンポン玉くらいの大きさで中が空洞になっているカリカリに揚げられたものの中に、野菜をトロトロで熱々の餡かけで和えたものや、カレー味のポテトサラダのようなものなど、様々な具材を入れて食べるというものでした。

逆に、最も不味かったものは、Nashik への遠足の時に昼食で立ち寄ったレストランで出された、腐った牛乳のような白い液体（何故か冷えている）の中に、これまた腐ったミートボールのようなものが入っているという食べ物でした。

### II 貧富の格差について

今回の研修に参加しようと考えた理由の一つに、バーラトという日本以外の国を通して、世界の实情についてその本当の姿を知らなければならないという想いがありました。そして、実際にそのことを垣間見ると、とても辛いものがありました。

街を歩いていけば、赤ん坊を抱いた母親や幼い子供が寄ってきて食べ物やお金を求めてきたり、バスから外を見れば、トタンとブルーシートで作った家屋に暮らす人々や、高架橋を屋根代わりに何も敷いていない地面に着の身着のまま暮らしている人がい

---

<sup>12</sup> 例えば、インドの伝統的な食べ物、めちゃくちゃ辛いカレー、等々



たりと、只々彼らを救える力のない自分自身に対してのもどかしさが募りました。

これらの光景は、町の外れの限られた場所だけの光景という訳ではなく、どこが境界であるか区別がつかない程、それが日常の光景なのだ、という印象を受けました。というのも、私たちの通った大学の周りはスラムであり、学校の敷地とは壁一枚で隔てられているだけでした。ボランティアの学生の一人は、「このスラムがある地域と言っているのは、この町で一番歴史の古い場所なんだ」と言っていました。つまり、昔からこの地域に暮らしている人々がいて、学校も駅も近いような、本来ならば栄えていてもおかしくない場所にさえもスラムがあるような状態が普通だということです。

一方で、私たちは、大学の理事長のお宅に招かれましたが、そこは本当に上流階級の家という感じで、外に広がるバーラトとあまりに異なっていた為、衝撃を受けました。

ただ、日本国内で、理事長のお宅と同程度の家に招かれたとしたら、あれほどの戸惑いを覚えたかと考えると、恐らく全く驚かなかったに違いありません。すなわち、バーラトで暮らす人々の「普通」と、我々日本人の「普通」には違いがあるのです。其々を相対的に比べた際、日本の「基準」でバーラトの「基準」を測ることは出来ないですし、その逆もまた不可能だということです。このようなことは、出国前でも分かっていたつもりでしたが、経験上の知識でないのであれば、何も分かっていないのと同じなのだと感じました。

たった二週間という短い間に、バーラトの「基準」に少しでも近づくことが出来、その視点から物事を見るという経験が出来たことは、今後も忘れずにいなければと思いました。

### III 宗教について

バーラトが言わずと知れた「宗教の国」であることも、私がこの研修に参加した理由の一つです。バーラトでは、人々は、其々に篤く宗教を信仰し、また多くの宗教が共存しています。このような環境というのは、日本では体験し難いものです。

私たちが滞在した二週間の間は、ちょうど向こうのガネーシャ<sup>13</sup>祭の時期と重なっていました。空港に到着し、滞在先へと向かう道には、大きなガネーシャの像があり、人々は太鼓を叩き踊っていました。そのような様子というのは、滞在中ずっと続いており、毎日どこかで太鼓が叩かれ、花火や爆竹の音が鳴り響いていました。あれ程熱狂出来るのは、本当にガネーシャ神のことが好きだからなのだろうと感じました。

また、彼らの知識が豊富なことについても驚きました。学生たちは皆、『ラーマヤナ』や『マハーヴァーラタ』の話を詳細に知っていますし、神々や祭りについてもしっかりと知識を持っています。彼らは、学校でこれらのことを習うのだそうですが、ただの知識として習って終わりなのではないのだと思います。それらは、精神面では彼らの生きる上での規範としての働きをし、また、実生活の中で祭りなどを通して実際に触れることで、自らを自己として形成する背景の一部になっているのだと感じました。

---

<sup>13</sup> ヒンドゥー教の神の一柱。像の頭と太鼓腹。

一方で、我々日本人のことを考えてみると、彼らバーラト人にとっての宗教に代わるものは思い浮かびません。それが故に、日本人は無宗教だと思われがちです。しかし、私は、単純にそれらを結びつけるべきではないと思います。何故ならば、所謂一般的な宗教に属するものではないが、しかし、宗教的な心というものを日本人は持っていると感じるからです。我々は、神道<sup>14</sup>や仏教に精通していなくても神社や寺院に行きますし、そこで何かを感じるはずです。

改めて、人間と宗教との関わりを考えることの難しさを感じました。

#### 参考資料

「インド思想史 A・B」(志賀浄邦先生) レジюме

---

<sup>14</sup> 神道を宗教とするかどうかは、人により意見の分かれる難しい問題であるが、ここでは、日本人の宗教的な心の発露の場の例として神社を挙げる為、便宜的に宗教の枠に加えて説明している。